反ファシズムの烽火 ――『世界文化』と『土曜日』――

A signal fire of anti-fascism, cultural coterie magazines “Sekaibunka” and “Doyoubi”

綿貫　ゆり

WATANUKI Yuri

京大滝川事件での敗北の後、日本社会が「暗い谷間」へと滑り落ちていく流れに抗うべく、1935 年 2 月、雑誌『世界文化』は創刊された。京大の美学研究者・中井正一が中心となり、真下信一・新村猛・富岡益五郎・久野収らが集った。彼らの目標は二つ―学問を真摯に行うこと、及び反戦・反ファシズムを掲げること―であった。各々の専門的論稿に加え、「世界文化情報欄」という時代状況（アクチュアリティ）への関心を前掲化したグローバルな報道を展開した。フランスの人民戦線運動と、その代表的雑誌『金曜日（ヴァンドルディ）』に鼓舞され、斎藤雷太郎・能勢克男らと共に 1939 年 10 月、新聞『土曜日』を発刊した。1937 年 11 月、言論による彼らの「抵抗」は権力により押し潰された。本稿はかつての「15 年戦争」期を「再演」しかねない、現代の日本社会の状況を視野に入れつつ、彼らの軌跡と「抵抗」言説に、再び光を当てようとするものである。

はじめに

楽友会館の二階、小さな会議室に若者たちは集っていた。彼ら同人は、滝川事件における闘争の敗北から、立ち上がろうとしていた…めいめい、ささやかながら、止むに止まれぬ想いを胸に。

総合雑誌『世界文化』は、発行部数 700 部―多くて 1000 部ほど―の小規模な雑誌であったにもかかわらず、特高警察によってその「会合」を律儀に記録されるほど「不穏視」されていた。後に述べるように、いくつかの偶然も重なり、1935 年 2 月の創刊から 2 年半あまりの活動の末、第 34 号をもって 1937 年 10 月に終刊へ追い込まれた。

この雑誌には、前奏曲とも呼ぶべき活動期間として、1930 年 9 月に発足した『美･批評』が存在した。『美・批評』には 1933 年 5 月を境とし、それ以前の第一次『美・批評』（第一次の同人は、中井正一・富岡益五郎・藤井源一・水沢澄夫・長広敏雄・徳永郁介・蓮実重康・藤井謙三・山口隆一・藤田貞次・伊東卓治・草薙正夫・辻部政太郎ら [1]）と、一年の休刊を挟み、1934 年 5 月からの第二次『美・批評』（第一次同人のうち中井正一・辻部政太郎・長広敏雄・藤田貞次・伊東卓治・藤井謙三らと、新たに真下信一・久野収・栗本勤・篁実・新村猛・和田洋一・森本文雄・熊沢復六・市村恵吾らが参加した [2]）の二つの活動時期があり、いずれの時期においても、中心人物は京都大学の美学・哲学グループの中井正一であった。

そして、この前奏曲の前半と後半の間に穿たれた深い亀裂こそ、その後の『世界文化』が有した共通命題である「反戦、反ファシズム」を浮上させた、衝撃的事件―滝川事件―であった。1933 年鳩山一郎文相が、京都大学刑法学の滝川幸辰教授の思想（罪刑法定論を重視する）を「危険思想」であると主張する反動右翼の主張を入れ、総長や教授会を無視し滝川教授を休職処分とした上、その著書を発禁とした事件である。

すでに 1930 年代初頭までに、共産党は当局による徹底的な弾圧を加えられ、合法活動のみ行う外郭団体までもが活動困難な状況に陥り、抑圧の手は自由主義者にまで迫り、思

想の自由・学問の自由は踏みにじられようとしていた。

事件当時、同志社の予科教授として同僚であった和田洋一・新村猛は、同 9 月から同僚となった真下信一を仲立ちとし、第二次『美・批評』に関わっていった。

新村は、「事件の敗北後、学問・思想の自由だけは守ろうということで、真下・久野両君や私など哲学や西洋文学の専攻者も加わって、昭和 9 年 2 月に『美・批評』を再刊しました。京大事件は、『世界文化』の刊行にとって逸しえない事件でした[3]」と述べている。

こうして、当時の時代状況（アクチュアリティ）への強い関心を引き起こした事件を受け、再刊を果たした第二次『美・批評』は 1934 年 9 月に第 32 号をもって終刊、同人を再組織したうえ、改題した雑誌『世界文化』が新たに発足してゆく。ただし、大きな問題意識―「学問的良心を守り、各専門で具体的に一歩でも学問的に問題を前進させることに努力するということ[4]」―は共通して、第一目標であり続けた。

日本社会が加速度的に保守化・右傾化し、世界情勢における重要事項が新聞・雑誌から隠されてゆく流れに抗い、『世界文化』は「世界文化情報」を通じ、ナチス・ドイツやイタリアのエチオピア侵略の批判、フランスを中心とした文化擁護国際作家連盟や人民戦線内閣の動向、またスペイン内戦の戦況などの「紹介」を「自然と」充実させてゆき、それが雑誌を形づくる大きな特色の一つとなっていった。

本稿は、さまざまな専門分野から―イデオロギー的に必ずしも立場を同じくしない―若き知識人たちが集った雑誌『世界文化』において、「反戦・反ファシズム」「理性の擁護」というフロントを共有し、「人民戦線」に関する報道･紹介の形をとりながら、いかに「抵抗」の言説を紡ぎ続けたかということを、具体的なテクストに立ち返りつつ、明らかにしようとするものである。その際、「世界文化情報」欄のおよそ 8 割 5 分にあたる記事の―身銭を切って海外から雑誌・新聞を取り寄せて―翻訳・執筆を行った同人である新村猛の言説に光をあて、従来の研究において「紹介」されてくることのなかった『世界文化』の奥行きと緊張感を湛えた筆の軌跡を追いかけることとする。

最終的に、『世界文化』の同人は 1937 年 11 月 8 日を皮切りに検挙されたが、合法雑誌を出版していたはず彼らが、治安維持法違反の容疑で捕らえられたことの有する意味についても、考察を試みたい。と言うのも、特定秘密保護法なるものが存在してしまっている現在の日本において、当時の「拡大解釈」をも凌駕した、ほぼ「無法」な取調べ及び起訴･求刑は、80 年前の「歴史」として眺める余裕はなくなりつつあるからだ。国の内外を問わず、政治のあらゆる場面から「理性」が消失している現実は、1930 年代という鏡が映し出す「抵抗」を必要としているにちがいないのだから。

1. 研究史

1 － 1.　歴史学―思想史―のなかで

雑誌『世界文化』の同人らは、その歩みが進むなかでフランス人民戦線の文化週刊誌『ヴァンドルディ』（金曜日）に着想を得て、松竹下鴨撮影所の大部屋俳優であった斎藤雷太郎が発刊していた『京都スタヂヲ通信』の基盤の全面的なバックアップにより、1936 年 7 月に月 2 度刊行の文化新聞『土曜日』を生み出した[5]。『世界文化』がよりアカデミックな色彩の強い雑誌であったのに対し、『土曜日』は学生を中心とした「一般読者」向けに比

較的分かりやすく書かれ、文化情報の充実したタブロイド紙であった。

雑誌『世界文化』と文化週刊誌『土曜日』は、1974 年～ 1975 年にかけて復刻刊行される以前、同人の回想録も和田洋一『灰色のユーモア』（理論社、1958 年）や辻部政太郎など数点があるのみという、資料不足の状況であった。それも相まって、これら二誌を対象とした研究は、雑誌の評価や位置づけは別として、「資料紹介」という域にとどまらざるを得ない面があった。60 年代後半～ 70 年代半頃にかけ、「復刻」されたものの、日本社会における社会運動の衰退、政治的関心の後退という流れの中で、およそ 30 年ものあいだ、顧みられなくなっていた。

1975 年以前の期間を見てみると、最も早い時期に松田道雄が知識人の系譜について論じた中で言及がある。弾圧によって組織的抵抗は一切できなくなった時期において、精神的抵抗を行った知識人を「かくれキリシタン」派と呼び、その人々が「日本マルクス主義と一定の距離をたもっていた」点を、「インンテリゲンチアの自立性の擁護といってもいい」と評価し、党派的な活動からの「転向」や「脱落」といった現象をより大きな歴史的文脈に置く視点を提示する。そして、「インテリゲンチアだけの独自の組織として、フラクション活動を排して戦争中に『世界文化』や『土曜日』を発行しつづけた人たちの果たした役割は高く評価されていいと思う。私はそこに日本のインテリゲンチアの独立宣言をみる。戦後あらたに組織された、インテリゲンチアのアカデミーのそとの知的協力の組織である民主主義科学者協会がフラクション活動にふりまわされて今日の壊滅状態にたち至ったのは、『世界文化』の意味を全く評価せず、インテリゲンチアの自立性をすすんで放棄した結果である[6]」と、戦後の日本社会に『世界文化』と『土曜日』の意義を汲み取る必要性を強く示唆する言及を行っている。

つづいて、山田宗睦は主に『世界文化』の前身であった『美・批評』における中井正一の美学研究における達成の高さと、その後の可能性に着目した論を展開している。「昭和ヒトケタ年代」の思想史の中心的テーマに、京都大学での同窓である三木清・戸坂潤・中井正一に共通する「国家権力から独立した思想の『公共圏』を設定」した点、及び「大衆の意識的な『公共圏』への組織化」が据えられるべきであるとし、『美・批評』期の中井の作品を詳しく取り上げている。その後の『世界文化』への「反ファッショ人民戦線運動への寄与をめざした、運動的思想雑誌」への転換が、「理論集団」であった『美・批評』との断絶をもたらした点を強調する。「『世界文化』による世界文化情報の提供は見事である」と一定の評価を行いつつも、「反ファシズムの運動的思想活動にウェイトをおかざるをえなかった事情、それをうみだした諸条件を、もうひとまわり大きな思想問題として考えなくてはならない」と、残された課題について述べている。

中井が、「共産党を中心とした政治勢力崩壊をも、人間の理性と良心と生活のうえにひろく浸みわたる不壊の堤防で包み支えるような、そういう『第二の堤防』」を築こうとしていた営みに対し、「それを目して、プチ・ブル的日和見主義、観念論的傾向と冷眼視する傾向が、“正統”派にはかたくなに持続されてきた」点も指摘している。山田は、『美・批評』と『世界文化』のあいだにある「一つの切れ目」は「じつをいって、前衛“正統”派の政治主義がひきおこす政治と思想・文化との切れ目につながっていたのである」と結論づけている[7]。

このように、松田のいう「かくれキリシタン」派と「日本マルクス主義」（山田論にお

いては「前衛“正統”派」）との「一定の距離」には、「知識人の自立」との評価と裏表に、山田のいう「プチ・ブル的日和見主義」への「冷眼視」が存在していた点が共通して浮上していることが分かる。そして両者とも、具体的な「テクスト」に踏み込むという手法でなく、雑誌全体の有した「性格」「特徴」を歴史的文脈に位置付けることを主眼としていた。

1961 年より同志社大学人文科学研究所において、「戦時下におけるキリスト者ならびに自由主義者の抵抗」という研究テーマで資料収集が開始された。1965 年 4 月の同研究所の機関紙『キリスト教社会問題研究』第 9 号と翌年の第 10 号に「戦時下抵抗の研究」特集を出した頃から軌道に乗ってきたと、同研究グループの代表・和田洋一は言う [8]。戦時下の自らの経験を基に、戦後もその問題意識を掘り下げ続けていく中、『美・批評』、『世界文化』と『土曜日』を対象とした調査を進めたのは、同グループの平林一であった。平林はこれら三誌の歩みを掘り起こし、「事実関係」を集積してはいるが、構造を浮かび上がらせる、あるいは個々のテクスト分析を行うといった作業に欠けている [9]。

同じく 60 年代に、歴史学研究会・現代史部会の神田文人は日本における人民戦線についての論考の中で、戦前の反体制運動を振り返りつつ、当時の共産主義運動側が、『世界文化』や『土曜日』が「明瞭に反ファシズムを意図した文化運動」であったことを「正当に評価できなかった」と、その問題点を指摘している。ただし神田は、文化運動であるこれらの雑誌活動が「人民戦線運動の中心となりうるものではなかった」とし、「人民戦線運動」を政治的な運動として狭めた見解を示している [10]。実際には、『世界文化』と同時代のフランスにおいて、さまざまな文化新聞や雑誌、「文化の家」といった文化団体の活動が人々の生活に広がり、それを基礎とし「人民戦線運動」は支えられていた。神田はこうした歴史的事実を見過ごしているか、あるいは矮小化していると言わざるをえない。

1970 年代初頭に編まれた『近代日本社会思想史Ⅱ』のなかで、「ファシズム体制下の思想的抵抗」を執筆している土方和夫は、「きわめて明白なマルクス主義者、唯物論者による唯物論研究会」とは路線を異にする思想グループとして『世界文化』を取り上げ、「民主主義的リベラリストから自覚的なマルクス主義者まで」を含む政治的立脚点の多様さを指摘し、活動の紹介を行っている。『世界文化』グループに対する土方の評価は、「時代と社会的条件がそれを許さなかった」としつつも、「あくまでインテリゲンチャのみによる活動であったという限界をもち、より本質的な基盤、すなわち労働者大衆との連繋を欠いていた」というものである。「労働者大衆との連繋」がいかに困難であったかに理解を示す記述を行いながらも、狭い意味での運動論的基準に依拠しているために、本稿の視点からすれば、『世界文化』を過小評価しているという印象を受ける。

土方は続けて、そうした社会状況の「制約のなかで、かれらは最大限に大衆へのアピールを模索した」と『土曜日』の紹介へと移行する。最大では発行部数およそ 8000 部に上った『土曜日』が、東京で出版されていた『労働雑誌』（発行部数約 6500 部）と並び、「合法的反ファッショ大衆紙」の「東西の双璧をなすものであった」と言う [11]。京都の喫茶店を中心とした読者層が、「大衆」であったかという点も再考の必要があろう（編集の斎藤は広く庶民に読んでもらうことを狙っていたが、当時の協力店であった喫茶室「フランソア」を経営していた立野留志子によれば、「三高京大同志社美大の学生が中心 [12]」―学生・インテリ層が読者の中心であった）が、土方は数や拡がりを重視し、また担い手は「労働者大衆であるべき」という、戦後の社会運動に主流であった価値観を無批判に当てはめて

いる面は、やはり見過ごし難い。

およそ30年を隔て、北河賢三が山川出版日本史リブレット『戦争と知識人』の中で、日中戦争前夜の反ファシズム文化運動として『世界文化』と『土曜日』にふたたび光を当てた。北河は、1930年代後半の全国紙・マスコミの批判力が著しく後退した時期に創刊された『労働雑誌』『人民文庫』『社会評論』や『学生評論』『リアル』といった媒体と並べて、これらの二誌を肯定的にかつ重要視する取り上げ方をしている[13]。神田の論考と比較し、歴史学主流派における大きな変化――より広い範囲の集団の（かならずしも共産主義運動に限定しない）文筆活動を「抵抗」運動として位置付ける――が見られる点を、強調しておきたい。

1 － 2. 文学のなかで―平野謙と『世界文化』―

制度的な歴史学の分野には入れられない「アマチュア」としての立場から、平野謙は昭和10年前後について、極めて多くの論考やエッセイを残している。彼は同時代を生きぬき、当時の文脈を共有しており、『世界文化』の定期購読者でもあった。先に挙げた歴史学の神田が言及していた点―つまり、当時の共産主義運動が有した問題点を、平野はより明晰に言語化している。「すべてを敵か味方かのオール・オア・ナッシングで割りきろうとするところに、日本革命運動のストイックな観念性があった」と。

日中戦争勃発前後の日本人民戦線運動にたずさわったグループや組織が皆、モスクワからの指令（コミンテルンの第7回大会の人民戦線戦術を受けた野坂参三からの『日本の共産主義者への手紙』）を中軸とし、その周囲を回転していたのに対し、これと「全く無縁な地点から出発した、ほとんど唯一無二の例外」として、平野は『世界文化』同人の活動を取り上げる。「コミンテルン―日本支部日本共産党というコンプレックスからほぼ完全に自由な《世界文化》の活動に」、（松田道雄が主張したように）「私も『日本のインテリゲンチャの独立宣言』をみたいと思うものである」と述べている[14]。自らも、プロレタリア科学研究所（プロ科）で―いつ逮捕されてもおかしくない状況下で―危ない橋を渡った経験、その後の日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の解散を目の当たりにした経験を持つ平野にとって、彼らの活動は「独立」した精神以外の何物でもなかった。

本稿は、松田および平野による『世界文化』『土曜日』の位置付けを踏まえつつ、その具体的なテクストから、「抵抗」の言説を汲みとることを目指すものである。

2. 滝川事件と『世界文化』同人

2 － 1. 学生と院生の運動

第一次『美･批評』が再刊に至る大きな契機となった、滝川事件については先に触れた。学生たちの運動は各学部で出身校別に組織され、それが各学部の高校代表者会議（高代会議）をつくり、週二回の会合を開き、決議実行機関となった。その上に、各学部の代表委員で構成される全学代表委員会ができ、自主的運動を調整する役割を果たしていた。久野収は文学部代表として、文学部大学院の学生と教授団にはたらきかけ、法学部支持を取り付ける役を負っていた。真夜中に文学部の諸教授の家を訪問して説得を試みたり、大学院

の学生を組織するため真下信一に助けをもとめた縁で、中井正一と出会うこととなった[15]。久野はそれ以前に真下が昭和 4 年『哲学研究』に書いた卒業論文を読み、その年の秋頃に真下の下宿を訪ねて以来つながりがあり、この事件を機に中井・真下・久野の三人で「毎晩のように、時計台下の法経の大きな教室で、あかあかと灯をつけて開かれて」いた高代会議に参加し、ことに真下は中井とコンビで「講堂あたりを昼となく夜となく相当うろうろしていた[16]」。しかし教授陣には、田辺元や小島祐馬らを除き、協力的でない者が多かったこともあり、運動は強引な弾圧によって敗れた。

新村猛は昭和 6 年秋頃から消費組合に加盟していたが、その頃役員の一人として活動していた中井を知るようになった。美学教授の深田康算（中井は愛弟子）の教え子が刊行していた『美・批評』の存在は知りつつも、新村がこのグループと結びつくのは滝川事件が終わろうとしていた昭和 8 年 9 月のことである。真下が同志社大学予科教師として就職したことで新村（および和田）と同僚になったことがきっかけであった。また当時、真下の下宿を訪れていた久野と新村は偶然出くわし、そこでの紹介を通じ、この二人にも結びつきが生まれた[17]。

真下はのちに、「京大事件における惨敗は、戦局の日ましの拡大、それにともなっていよいよ急になっていく思想弾圧のなかで、あの人間の条件をゆずるか、ゆずらないかの決断を私たちにせまらずにはおかなかった。……私たちは京大事件での敗北を承認できず、ファシズムと戦争勢力にたいする抵抗、ヒューマニズムと理性主義の擁護のたたかいを場を変えて継続するよりほかなかった[18]」と振り返っている。

京大闘争を通じて中井と親しくなった久野は闘争敗北の後、そのころ住んでいた北白川から下鴨の中井宅に「部屋代無料、少額の食費」で招かれ、「二人で自炊を続け」ながら、久野は卒業論文を執筆していた[19]。この頃、中井邸を日々訪れる『美・批評』メンバーと久野が知り合うようになり、同誌の再刊に向け話が動きだす。中井・富岡・久野の三人の企画から、再刊『美・批評』は 1934 年 5 月に第 28 号から 6 冊出されるに至った。

再刊時の目標が「二面作戦」であったと、辻部は述べる。「ほんとうのアカデミズムをわれわれで少しでも鍛えていこう、観念的にどうこういうていてもしようがないんだから、どの分野でも、少しずつでも学問的に積み重ねていこう」という目標が一つ、二つ目は「どうしてもファッショ的な動向に対しては、反ファシズム、反戦という点」であった[20]。

2 － 2. 雑誌『世界文化』創刊の内幕

1935 年 2 月『世界文化』創刊の直接の動機は、フランスにおける「フロン・ポピュレール」であった。1934 年 7 月、40 万人以上にもおよぶ民主戦線を支持する大規模なデモがパリで成立したことを受けて、同人の大多数がこれを支持し、「新しい反ファシズム運動の情報と理論を紹介する抵抗誌『世界文化』が毎月一回の研究会とともに誕生することになった[21]」。

編集・経営は『美・批評』時から継続して、富岡益五郎が受け持った。富岡は、「縁の下の力もち」として、発行部数 700 ～ 1000 部ほどを「一人で宛名を書いたり、できあがった雑誌を袋に入れたり、郵便局にもっていったりしていた[22]」。ページ数は 70 頁ほどで、一部 20 銭で販売した[23]。1935 年当時の物価は、タバコの「バット」が一箱 7 銭、外食の

うどん・そばが一杯 10 銭～ 13 銭、喫茶店のコーヒーが一杯 10 銭であった[24]。同人は毎月 2 円～ 3 円の会費を払っていたが、部数の半分近くが返品になるため、経営は全くの赤字であり、多くの人のカンパで成り立っていた。しかも費用を抑えるため、久野は七曜社という小さな印刷社に頼み欧文活字を大阪で買いつけてもらい、自らピンセットで活字を拾って組んでいた[25]。

同人たちは「出来上がった雑誌を売りさばくという点では不熱心であった[26]」が、発行した雑誌の内容そのものについては、月に一度の合評会で徹底的に議論を戦わせた。そして彼らの中心には常に、中井正一という存在があったことを忘れてはならない。注 19 でも触れたように、中井の周りには常日頃から多くの知識人・活動家が集まっていた。辻部は中井のことを「ユニークで、魅力的な発想法をする美学･哲学者」であり、「視野も広く、無類のフレキシビリティと、プロダクティヴな思索力とを巧まずしてもち、自然発生的な形で、われわれのグループを拡げて行く大きい要素となった[27]」と述懐している。
また、久野は中井が消費組合運動と滝川事件の京大闘争のなかで、「下から本当に連合を公論によって組み上げて行く」体験を有し、「上からの指導や拘束を何一つ加えない」スタイルであった点を指摘している[28]。

2 － 3.「同伴者」言説への疑問

京都の知識人の学際的な総合雑誌として出航した『世界文化』は、非合法運動シンパのグループから、しばしば謂れのない陰口や攻撃を受けていた。『学生評論』などの同人から「プチブルの玩具」（清水三男）として敵視され、あるいは罵られ地面に雑誌を叩きつけられた（前橋正二）りもした[29]。

共産党は事実上壊滅していたが、個別に残っていた非合法組織が存在し、『世界文化』の同人個々に対し、「左翼インテリが合法雑誌を出して何になるのか」「マスターベーションはやめろ」と言った言葉を投げつけ「非合法運動をやっている自分たちにカンパ」をするよう働きかけを行うことがままあった[30]。

また中井は同郷で美学専攻を志す佐々木基一が訪れた時、「京都で自分たちは万一に備えて第二の堤防を築こうとしているのだが、急進的な連中はそんなやり方は生ぬるい、日和見だといって批判する、まったく困ったものだと言って慨嘆した[31]」こともあったという。このような「合法運動」を見下す風潮のなか、『土曜日』の経営・編集責任者であった大部屋俳優を生業とする斎藤は、かつて自分が全協一般組織の京都地区での非合法運動の一端を経験したことを踏まえ、「どんな意思の固い人間でも限界があるし、自己犠牲の精神をいつまでも持続することは困難でもある。またそれを期待してはならないと思った。……犠牲ばかり多くて実効のあがらないやり方で、あたら善意と熱意を持った人々を、犬死させてはならないというのが、私の体験から得た見解」だったという。そして、発行した新聞を通じ「人々の善意と熱意を組織し、お互いが親しみ、はげましあうことによって、人間的に成長して自覚分子となり、無産政党に投票するようになる[32]」ことを願っていた。

新村は、当時インテリ内部において主流を占めた「インテリは労働者に合流すべき」という言説に対し、「初めは何か劣等感のようなものをもっていた」が、それを自ら克服しなければならないと思い、「インテリはインテリとしての使命もあるし、やるべきことが

ある。何も劣等感をもったり自ら卑下したりすることはないと思ったものです[33]」と語り、そうした想いを確かめる力をくれたのが、フランス人民戦線であったという。こうした新村の人民戦線の紹介に、同人たちも元気づけられていた。

非合法運動シンパ界隈の逆風をものともせず、久野は『世界文化』への助力を求め、羽仁五郎を訪ね「党や幹部から下に降りてくる指令を守るような、いわゆる“上からの哲学”は教条主義を生み出すだけで、これからは、下からのグループ運動、サークル活動が必要[34]」との持論に確信を強めていった。東京へ行くごと羽仁を相談役とし、また小林勇にも意見を求めるなど、自らのネットワークを駆使していた。

雑誌に携わった各自の熱意と、その外から活動を支える知識人の善意とが、自らの足で立つ『世界文化』、そしてその後に現れる『土曜日』の原動力となったのである。

3. 新村猛の「抵抗」言説

では続いて、雑誌『世界文化』の最大の特徴である「反戦・反ファシズム」という―暗黙のうちに同人たちに共有されていた―フロントを代表する記事「世界文化情報」を執筆していた新村のテクストを見てゆくこととする。

3 － 1.　文化擁護国際作家連盟

1935 年 6 月 21 日～ 6 月 25 日にパリで開催された「文化の擁護のための国際作家大会」の模様を伝える 1935 年 9 月号は、38 カ国の代表が集まった大会の報告内容を、さながら実況中継で報じている。

6 月 23 日夜の部において亡命作家ベルトルト・ブレヒトの演説より、「作家たちはファシズムの蛮行を描くだけで満足せず、ファシズムの秩序と闘わなければならない。悪の根源はファシズムによって隠蔽されている生産手段の私的所有である。われわれはこれを審問に付さなければならない」

6 月 24 日夜の部、『ソヴェート映画』著者レオン・ムーシナックの発言「世界が収取者と被収取者との二つの陣營に分れ、第三の陣營のない今日、作家は、特に資本主義諸國の作家たちは自分たちの對象である讀者に就いて深く考へなければならない。讀者に迎合してゐるのか、進歩に味方してゐるのか、自國及び全人類の文化遺産を擁護しようとしてゐるのか、フアシズムに反對してゐるのか、などと反省しなければならない。未來は吾々がどのやうな讀者を撰ぶかに從つて吾々の上に加へる評價を動かし變えるであらう[35]」

ここに引用した「記事」は、確かにパリでの作家大会報告を「紹介」したものである。しかし、取り寄せた雑誌・新聞から、何を選び、引用するかという時、―もちろんニュースの内容そのものの正確さは念頭に置かれていたであろうが―発言内容を“翻訳して載せる”新村は、「選択」を行っている。作家たちの演説に対する深い共感が、作用している。「反ファシズム」という言葉が繰り返されるのは、この大会の趣旨・性格のみによるとこ

ろと片付けられない面がある。ファシズムに反対する作家が各国から集い、次々と熱のこもった発言を行う議場の「紹介」を通じ、新村の強い共感が「情報欄」に迸り出たと言って差し支えなかろう。

つづく 1935 年 10 月号では、先の「国際作家大会」の成果・反響・意義と、そこで成立した「文化擁護国際作家連盟」の幹部会メンバーの紹介と主な演説の、フランスの新聞での取り上げ方を示した後、自らの感想を次のように述べている。

啓蒙といへば、昨年の全ソ作家大會へ出席したジャン・リシャール・ブロックもその後同盟内の各地を見學し、確かに啓蒙されて歸つて來た。しかし一定の政治哲學上の原理や命題の幾つかを承認してゐるからといつて、それだけで人は本當に啓蒙されてゐると言へるだらうか。さう思ふやうな卑俗な優越感こそ自己及び勤勞大衆の啓蒙の妨碍をなすのではないか。…良い政治の空氣を吸つてゐる若いソヴェート文學者が易す易すと語つてゐる事が大會に參加した大多數の資本主義諸國の作家たちに取つては、理解するのにどれほど難渋であらう……[36]

ここでの新村の言説において注目すべきは、当時の左翼インテリに一般的であった「ソ連崇拝」と、彼の思想の間にはっきりと距離がある点である。新村は、「社会主義・共産主義に目覚める」ことが、「啓蒙」の全てではないとの立場に立っている。新村を含め、『世界文化』の同人が殆ど皆「大正教養主義」の中で育ったという文脈を考え合わせると、「教養を身につける」という意味での「啓蒙」も、同様に重視されていたことが、ここに含意されているといえる。

また、社会主義・共産主義の思想に「目覚めた」ことを以て、そうでない人間に対しにわかに「優越感」を持ち、高みに立つ精神的姿勢が有する問題点にも警鐘を鳴らしてもいる。言い換えれば、新村の中には、「啓蒙」の複数性、「思想」の複数性を尊重する思想が存在していたとも言えよう。

ソヴィエトへの「全幅の信頼」とは距離をおきつつ、またソヴィエト信奉の有無を以て性急に作家の格を測ることはせず、しかし、社会主義と反ファシズムへの共感という地点に立ち、連帯してゆく意志も同時に有していた。そして自らも、「資本主義諸国」の知識人の一員として―現実的にはソ連の作家のようには物を言えない立場を言えない―葛藤を引き受けていることがうかがえる。

3 － 2. 人民戦線内閣

1935 年 5 月初旬、総選挙の結果を受け、6 月末にブルム社会党首班内閣が成立した。フランス人民戦線の誕生である。

1936 年 5 月号では『モンド』廃刊と『金曜日（ヴアンドルデイ）』創刊（1935 年 11 月 8 日）の辞を、

「『作家が創刊し、作家が指導する「金曜日」はこの國の自由な人々の機關、世界の自由の反響となるであらう。「金曜日」は此の目的で作られた。…吾吾の行動は、フランスには、互ひに直接に交し合ひたいと求めてゐる自由な作家の集團と、自由な人々から成る厖大な

大衆があるといふ二重の賭金の上に基礎を置いてゐる。…生活を勤勞の上に築き、先づ人間の尊嚴を信じる人々。…國家や社會は、最も弱い子供を貪り喰ふ冷血の怪物であるべきではなくて、仕事を完成し、生活の幸福、情操の向上、精神の明晰に對して權利を持つ人々の友愛的支持であるべきだと信ずる人々。これらの人全部が吾吾の読者である』[37]」と伝えている。

『世界文化』の同人たちは、この言葉に強く惹きつけられ、『金曜日』とそれを支える知識人たちの活躍に鼓舞された。その頃、書き手を探していた斎藤雷太郎も『金曜日』について中井たちと話を重ねるうち『金曜日』に共感を抱くようになり、1936 年 7 月『土曜日』の創刊へと繋がったのである。

1935 年 6 月号および 1936 年 9 月号の「情報欄」では、1935 年 3 月から AEAR（革命的作家美術家連盟）を中心とした反ファシズム文化運動が存在したこと、それを基盤に「文化の家」と呼ばれる組織が生まれたことも紹介している。「文化の家」に集ったのは演劇・音楽、映画、絵画等のグループであり、その数は 18 にも登った。300 人以上の作家も合流し、最初パリにおいて始まったこれらの活動は、他の都市にも広がりを見せていた。文化上の反ファシズム運動として、1937 年 8 月号でもこのニュースを継続して取り上げ、各重要都市に支部を持った「文化の家連盟」へと発展したことを伝えている。

3 － 3. スペイン内戦

1937 年 9 月号では、先に紹介した「文化擁護国際作家大会」の第二回大会がスペイン内乱下（7 月 4 日～ 11 日）で行われたことを、フランス語夕刊新聞『ス・ソワール』から紹介している。

7 月 4 日（バレンシア市庁ホール）スペイン代表のホセ・ベルガミンの発言より「全イスパニア文學は血で、イスパニヤ民衆の血で書かれてゐる。さうだ、この血はロペ・デ・ベガの言つてゐるやうに『沈默の書のなかで吾々に眞理をさけんでゐる』のである。今日もの言はぬ犠牲者のなかで、死に抗する生命の絶えざる變革の行動のなかで、吾々に同じ眞理を叫び續けてゐるのはこの同じ血である。イスパニア民衆は七月十八日にマドリツドでただ一人の如くまた獨りゐる人の如く立上がつた。獨りではあるが、孤立してはゐない。その歴史のなかで結局は常に獨りゐるイスパニア民衆と共に文化のあらゆる人間的價値は常に救はれ、今日も亦救はれるであらう[38]」。

代表団が戦況の激化するマドリッドで 7 月 5 日～ 9 日まで滞在するなかで、兵士との交流を行い、7 日に集まった聴衆の過半数は人民軍諸部隊から派遣された兵士であることを伝えている。翌 1937 年 10 月号（『世界文化』最終号）では、この大会がパリへと場所を移し 7 月 17 日～ 18 日に引続き行われたことも追って紹介している。7 月 14 日の大革命記念日のデモの様子を詳細に記述し、会場となったポルト・サン・マルタン劇場は立錐の余地もないほど満員となったことが、その発言者の紹介とともに伝えられている。

妻子をフランコの部下によって殺害されたスペイン代表の作家ラモン･J･センデルの「文

化とは人間の尊嚴の最高の表現に外ならない。それは要するに自由の木の實である。牢獄で書かれたドン・キホーテの場合でさへさうである」との発言を引用し、フランス代表のひとりジャン・リシャール・ブロックの「自由のために闘ふ作家は歴史を書いてゐるのではなくて、歴史を作つてゐるのだ」という言葉で締めくくっている[39]。

検挙の時期が迫っていた当時、「世界文化情報欄」執筆に専心した心境について新村は、「それは、半ばヨーロッパでの昂揚した人民戦線運動から強い影響を受けた結果であり、半ば、この政治運動について深い確信をもち、その報道に知識人としてあたかも生き甲斐を覚えていた結果であった。……私は自分の執筆や言論による活動がそれほど大きな効果を挙げるだろうとは期待せず、ただひたすら知識人としての責務感・使命感に駆られて、向う見ずに思われそうな活動を止めなかったのである[40]」と述懐している。

新村は、ただ「出来事」としての「人民戦線運動」を無機的に「報道」したのではなかった。ヨーロッパでの反戦・反ファシズムのあらゆる活動への深い共感と連帯感から、記事を「選び出し」、自らの手にあまるほどの翻訳を、同人や協力者の手を借りながら、紙面に仕上げていったのだった。彼の執筆した「記事」は、それらを「書く」行為がすでに、日本社会の軍国主義とあらゆる自由の抑圧への「抵抗」の精神で貫かれていたのである。

4.『世界文化』『土曜日』グループ検挙

新村らが知識人としての誇りを賭して綴ったテクストは、1937 年 11 月 8 日の検挙によって断ち切られた。容疑は、「治安維持法違反」であった。この日同時に検挙されたのは、新村猛・中井正一・真下信一[41]と、『土曜日』編集・経営の斎藤雷太郎[42]であった。その後、1937 年 11 月 26 日に久野収・禰津正志が、そして 1938 年 6 月 24 日に和田洋一・武谷三男・能勢克男もつづいて検挙された[43]。

4 － 1. 治安維持法「違反」

『世界文化』および『土曜日』の出版活動は、当然ながら検閲への配慮を行っていたが、全く合法な行為であった。当時、雑誌上で時事的内容を扱う場合、新聞紙法に触れるため、保証金を積まなければならず、この 500 円を同人から募り、当局へ納めることで『世界文化』は刊行にこぎつけたのだった[44]。

文字通り「合法」雑誌として終刊まで一度も注意や発禁処分を受けることなく運営しつづけた。ただし、同人たちの多くは「捕まるようなことは何ひとつしていない」という考えを抱きつつも、「いつかは捕まる」という不安も同時に抱えていた[45]。

この事件についての内務省警保局資料に見える「起訴内容[46]」があからさまな「デッチ上げ」であったことは、同人はもとより、先行研究で挙げた平野らによって指摘されてきている[47]。「デッチ上げ」の内容は、自由主義者やヒューマニスト、マルクス主義を理解してはいるが共産主義者でない人々を、「共産主義者である」と決めつけ、しかもその活動が「コミンテルン方針に従って行われた」とした点である[48]。先にも述べたように、彼らの雑誌は非合法運動を密かに続けていたグループやそのシンパから「プチ・ブルの玩具」

とまで罵られるほど、その立場を異にしていたのに、である。

1937 年 7 月 7 日の日中戦争開戦以後、日本社会が猛烈な勢いで戦時体制へとなだれ込んでいったことは当然、背景のひとつとしてあった。しかし、『世界文化』および『土曜日』同人の検挙―京都の「人民戦線的文化運動」事件[49]―の原因は、「書かれていた内容」ではなく「同人同士の人間関係」にあった。不運にも、当時の特高警察が最も警戒していた国際共産主義（コミンテルン）との「つながり」に予期せぬ形で、巻き込まれたのである。

本稿は、この事件の性格が、無法とも呼ぶべき治安維持法の悪質な「拡大解釈」の先取りであったという分析を踏襲すると同時に、特高警察が無理やり「拡大解釈」を犯してまで『世界文化』と『土曜日』を叩き潰した「真の理由」について、明らかにすることを目指したい。

4 － 2. 招かれざる客―小林陽之助と「人民戦線戦術」―

これから「真の理由」へと向かう前に、『世界文化』『土曜日』のメンバーの第一次検挙から 1 年ほど前へ時間を遡り、論を進めることとする。

1936 年 11 月、北白川で『世界文化』最新号の合評会が持たれた夜の帰り道、同人・和田洋一は二人組の男―特高―に呼び止められた。和田は下鴨署に連行され、事情聴取を受けた際、刑事の強い出方に萎縮し、「その晩集まった者の名前や、会合の模様などを、包みかくさず言ってしまった」のである。その後も『世界文化』の内情について話をしてくれるよう刑事に頼まれ、三度に渡り下鴨署を訪れ、木下巡査部長なる特高刑事に話をしている。和田は、その理由を恐怖心に加え、―驚くべきことに！―『世界文化』を危険視している特高に対し、「気持は重かったが、一方、二回三回と説明をすれば、特高の疑惑もだんだんとけるだろうし、解かねばならないと考えていた」から、と説明している。木下に会うことを止めた後、（和田の独断で行っていた）特高との面会について同人に報告した際、「ひどくふんがいした者も一、二あった」という。和田は自身の行為をスパイ行為と認めつつ、友人が危険な人物でないことを懸命に説くためであったから、「良心に恥じることはなかった」とも述べている[50]。

こうした「善意」による「スパイ行為」におよんだ和田を、和田の義弟で非合法活動に従事した経験を持つ守屋典郎は「特高などというものをそんな甘い人間と思うほど、彼はお人好しでもあった[51]」と皮肉を込めて書いているが、本稿における問題は、和田の「スパイ行為」にあるのではない。

真下は特高の取調べについて、「私の同志社時代の 4 年間ほど、特高はずうっと私の動静をこまかく記録していたようです[52]」と述べており、1933 年 9 月以降、京大滝川事件に深く関わった人物たちがマークされ始めたことが分かる。また和田の告白も併せれば、少なくとも 1936 年 11 月以前から『世界文化』自体が監視されており、何らかの理由で和田に狙いを定め特高が接近したことになる。

一方では、客観的にも主観的にも全くの「合法雑誌」であった『世界文化』は、他方ではその始まりからすでに、特高警察にとって「監視対象」であった。つまり、特高にとって場合によっては―法的手続きの問題は別とし―「いつでも捕まえられる」グループだった、ということになる。ならば何故、彼らの検挙は 1937 年 11 月 8 日であったか。これこ

そが、次に述べる検挙のタイミングを決した「真の理由」、小林陽之助の存在である。

小林は 1926 年、第二高等学校理科甲類在学中に「社会科学研究会」の活動を理由に退学となった後ドイツへ渡り、1930 年 9 月ベルリン工科大学に入学し、それから 4 ヶ月後にドイツ共産党に入党、大学を中退しハンブルクで「国際海員倶楽部」の役員として活動した。1932 年には情勢の悪化からウィーンへ逃れ、その 5 月にクウトペ（共産主義大学）に入学、1935 年 6 月に卒業という経歴を持つ、共産主義者の模範的活動家である。彼はモスクワで野坂らと共に 1935 年 7 月のコミンテルン第 7 回大会に日本青年代表として出席した。そこでの決定方針―人民戦線戦術―を野坂（岡野進）が記した（指令書ともいうべき）『日本の共産主義者への手紙』を持ち帰るとともに、共産党の情勢探知を行うため日本潜入を野坂より命じられた[53]。

この潜入任務において、フランスで共に運動をした経験もあり、頼りになると見込まれ、小林に接近された人物が、―『世界文化』に準同人格で執筆活動を行っていた―大岩誠だったのである[54]。久野の説では、大岩が小林に『世界文化』を紹介したとあるが、大岩は小林の依頼に応じ、彼のために信頼に足ると大岩が見なしていた同志―守屋典郎と禰津正志を紹介したのだった[55]。

小林はモスクワ―フランス―イタリア―上海―長崎ルートで 1936 年 7 月に入国し、はじめ鎌倉へ向かい、大岩誠を頼って京都へ来たのが 1936 年 11 月であった。同月、和田が特高から事情聴取を受けたのは、この事実と全く無関係の偶然ではあるまい。つまり和田は、小林と接触した大岩誠（およびそこから派生する禰津正志）の筋と、大岩の紹介で小林と接触した義弟守屋典郎の筋の、双方が交差する人物だったのである。

『世界文化』の準同人格となっていた大岩誠が、コミンテルンの「密使」として潜入任務を負った小林陽之助と連絡を持った時、『世界文化』『土曜日』の検挙は決定的なものとなった。先にも述べたように、「書かれた内容」でなく、「人間の繋がり」が引き金だったのである。「遅すぎた」コミンテルンの方針転換、野坂の彼我の力量差を顧みぬあまりに無謀な命令、小林から放たれた大岩への白羽の矢が、コミンテルンから全く独立した存在として始まり、小さくも地道な活動を行っていた京都の文化雑誌を葬ったのだった…。

1937 年 11 月の『世界文化』『土曜日』メンバーの第一次検挙を追うようにして、翌 12 月小林は京都で検挙され、有罪判決を受け、その後獄中で病死した。

おわりに

同時代に生きるということは、自らの意図とは関係なく、自らに押し寄せて来る「外的要因」から、完全に自由となることは叶わぬということである。繰り返しになるが、中井正一、真下信一、新村猛、久野収、和田洋一らは皆、「共産主義者」では、なかった。特高の作り上げた虚構の筋書きに則り、「共産主義者」として起訴されるために（未決のまま獄中生活を送るかの二択を迫られ）、「取調べ」の過程で止むを得ず「共産主義者」に「転向」させられたうえ、「共産主義者」であったことを「心底」反省し―「再転向」する―「手記」の執筆を強要された。

平野謙が言うように、「警察で和田洋一らが頑張ろうが頑張るまいが、『共産主義社会の実現を企図しつゝ活動し居るもの』として起訴することは、警察当局の既定方針にほかな

らなかった」し、「『孰れも表面合法を装ふも其の真目的は所謂人民戦線戦術に依る共産主義社会の実現を企図し』という一点にアクセントを打ちながら、治安維持法違反容疑とは全く無縁な市民を続々逮捕する絶好の口実をとらえ、着々その『新方針』を先取りした[56]」のだった。

中井と久野を除いて、検挙されたメンバーは身体的「拷問」を受けることはなかった。しかし、新村にとって「手記」の強要は、別なる苦しみを与えるものだった。彼は言う、「およそ知識人らしい知識人すべてにとって無理強いに思想犯に仕立てられることは正に精神的な拷問を受けるに等しい[57]」と。

自由と真理を守ろうとする知識人による合法的出版活動は、日本社会の時局に対する「抵抗」であった。しかし、日本社会の主流のみならず、彼らのいとなみを見下し嘲る人々が、彼らの周りにはつねに在った。遥かソビエトから予期せぬ使者が渡って来た。新村らの「抵抗」の言説は、「同時代」の政治的圧力により、封殺された。しかし、組織に寄りかかることなく、自ら思考する独立した知識人の言葉は、今なお「抵抗する」者たちへの深い連帯の意思を、発し続けている。

1　辻部政太郎「『世界文化』と『土曜日』のころ」『思想の科学 第 5 次』（思想の科学社、1963 年 8 月号）98 頁。

2　平林一「『美･批評』の人びと―『世界文化』研究 (一)」『キリスト教社会問題研究』（同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1965 年 4 月号）92 頁。

3　新村猛「半生を自ら語る」『新村猛著作集 第三巻 ヨーロッパ文明との対話』（三一書房、1994 年）563 頁。

4　辻部、前掲、101 頁。

5　『土曜日』の刊行までのいきさつについては、斎藤雷太郎「『土曜日』について」『復刻土曜日』（三一書房、1974 年）所収、および「民衆の言葉をもとめて――シンポジウム･『土曜日』と今をつなぐもの」のなかで、斎藤雷太郎が詳しく語っている。

6　松田道雄「日本の知識人」『近代日本思想史講座Ⅳ』（筑摩書房、1959 年）55 頁。

7　山田宗睦「『美・批評』、『世界文化』」『思想』（岩波書店、1963 年 8 月号）112―114 頁。

8　同志社大学人文科学研究所（キリスト教社会問題研究会）編『戦時下抵抗の研究Ⅰ』（みすず書房、1968 年）1 頁。

9　60 年代の最初の集積は、平林一「『美・批評』の人びと―『世界文化』研究 (一)」『キリスト教社会問題研究』（同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1965 年 4 月号）80 ― 96 頁。および「『美・批評』の人びと―『世界文化』研究 (二)」『キリスト教社会問題研究』（同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1966 年 4 月号）14 ― 38 頁。90 年代に再びこれらの論考を、平林一『危機における文化―現代史への試み』（白地社、1993 年）に再録している。

10　神田文人「日本における人民戦線について」『歴史学研究』（歴史学研究会、1964 年 8 月、第 291 号）18―19 頁。また、神田はこの論考の結論部において、当時の共産党が厳しい弾圧にもかかわらず「天皇制に対して明確な対決の姿勢をもっていた」反面、「この戦略

目標の提示は時と条件を無視しても掲げられ」、「そのため、軍部ファシズムの進展に対し、これとの闘いを広汎に組織するため、一時的には天皇制廃止のスローガンを降しても反軍反ファシズムの統一戦線をはかるべきだ、という理論はうけいれられなかった。事態の進展のなかで、その時点における政治目標が何であるかを把握できなかった」との重要な示唆を行っている。

[11] 土方和雄「日本型ファシズムの擡頭と抵抗」『近代日本社会思想史Ⅱ』（有斐閣、1971 年）168―170 頁。

[12] 和田洋一・斎藤雷太郎・立野留志子「民衆のことばをもとめて―シンポジウム・『土曜日』と今をつなぐもの」『思想の科学 第 7 次』（思想の科学社、1984 年 11 月号）78 頁。喫茶室フランソアの他、『土曜日』に広告を出していた喫茶店ネットワーク（23 店舗あまり）については、中村勝「『土曜日』と喫茶店ネットワーク」『京都フィールドワークのススメ あるく みる きく よむ』（昭和堂、2003 年）41―49 頁を参照。

[13] 北河賢三『戦争と知識人』（山川出版社、2003 年）9―15 頁。

[14] 平野謙「日中戦争勃発前後――日本人民戦線の可能性をめぐって」『すばる』（集英社、1973 年 3 月号）28―29 頁。また、同論考のなかで平野は『世界文化』『土曜日』の同人が「治安維持法違反容疑」によって一斉検挙されたことについて、「明らかに根も葉もない『まったくのデッチ上げ』」であることも指摘し、「恣意的な法の拡大解釈」が（論稿執筆時の社会状況に照らして）完全に過去のものとなってはいない点にも、警鐘を鳴らしている。

[15] 久野収『久野収 市民として哲学者として』（毎日新聞社、1995 年）33―34 頁。久野が中井に運動への協力を求め頼みに行った際、中井が久野に好感を持った理由を、「当時の共産党系の学生は、後ろに必ず党の権威を笠にきて威張るところがある。オレは地下の共産党と通じておる。お前らプチブル・インテリはオレたちの言うことを聞かなきゃいかんとでも言わんばかりの態度」がなかったからと述べている。

[16] 「座談会」『世界文化 復刻（3）』（小学館、1975 年）18 頁。

[17] 前掲「座談会」、23 頁。

[18] 真下信一『時代に生きる思想』（新日本出版社、1971 年）164 頁。

[19] 久野、前掲書、56―57 頁。前掲の辻部の回想によると、「下鴨一中前の中井宅の二階には、『中井ホテル』と称するほどいろいろな友人、知人、学生たちの往来が繁かった」（99 頁）という。また、ねずまさし「『土曜日』―戦争前夜の娯楽新聞」『現代と思想』（青木書店、1977 年 12 月号）には「新村猛、市村恵吾、和田洋一、長広敏雄、富岡益五郎らの家からは、能勢、中井の住所は、歩いて 20 分以内のところにあり、この集落性がまた『世界文化』の経営、編集に有効に作用したと同時に、『土曜日』の創刊にも非常に役にたった。斎藤もまた能勢邸には歩いてゆける所に住んでいた」（173 頁）とあり、特高の目を考慮し、複数人で集まることやその頻度を抑えていたとはいえ、日々密な関係を維持することが可能な地理的条件を備えていたことは記憶されたい。

[20] 前掲「座談会」、21 頁。辻部の回想および久野の前掲書によれば、再刊から『美・批評』最終号までのあいだ、資金面では大阪朝日の上野精一社主から月 30 円～ 25 円のポケット・マネーによる支援を受けていた。

[21] 久野、前掲書、59 頁。

[22] 和田洋一・斎藤雷太郎・立野留志子「民衆のことばをもとめて―シンポジウム・『土曜日』と今をつなぐもの」73 頁。ここで、約 4000 部～ 8000 部を発刊した『土曜日』の経営・発送を取り仕切る斎藤の採った「近くに住んでいる悪童どもを 7 人、8 人、自分の下宿に集め、『さあ、おじさんのやる通りみんなやるんだ』と言って、タブロイド版の新聞を二つに折って帯封にしてのりをつける。……仕事が片付くと、ごほうびにまんじゅうやせんべいが斎藤のおじさんからあたえられる」というユニークな方法についても言及があり、非常に興味深い。

[23] ねずまさし「プチブルの同人雑誌『世界文化』」『思想』（岩波書店、1976 年 11 月号）73 頁。

[24] 森永卓郎『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』（展望社、2008 年）100 頁、120 頁、129 頁。

[25] 久野、前掲書、70 頁。

[26] 和田洋一『私の昭和史「世界文化」のころ』（小学館、1976 年）203 頁。

[27] 辻部、前掲論文、99 頁。また、中井正一『美と集団の論理』（中央公論社、1962 年）所収の同人たちの回想記からは、中井を中心とした『世界文化』のグループが学際的雰囲気の中で知性を磨き高めあっていたことが垣間見える。

[28] 新井直之『敗戦体験と戦後思想― 12 人の軌跡―』（論創社、1997 年）341 頁。

[29] ねずまさし「プチブルの同人雑誌『世界文化』」76 頁、86 頁。

[30] 和田、前掲書、24 頁。また真下も、「『世界文化』の思い出」のなかで、「当時の非合法共産党の諸君は、『世界文化』を評価してなかったわけでしょう。インテリのなまぬるい自慰的なサロン談義というような見方」（185 頁）があったと証言している。

[31] 佐々木基一『昭和文学交友記』（新潮社、1983 年）39 頁。

[32] 斎藤雷太郎「『土曜日』について」『復刻 土曜日』（三一書房、1974 年）8 頁。

[33] 前掲「座談会」、37 頁。

[34] 久野、前掲書、78 頁。東京では久野が羽仁と小林に助言を受け、京都では新村と禰津が林達夫を訪ね、助言を得ていたという。また左翼の仲間を通じ、東大学生消費組合に『世界文化』を置いてもらっていたことから、戦後『近代文学』の同人となる佐々木基一や荒正人はこれを購読していたことにも言及がある。

[35] 『世界文化』（1935 年第 8 号、9 月号）29 頁。同箇所は、『新村猛著作集 第二巻「世界文化」三十年代の政治思想的証言』（三一書房、1994 年）147 頁に再録される際、「収取者」が「搾取者」に、また「被収取者」が「被搾取者」へと改められており、検閲を意識し婉曲表現を用いていたことがうかがえる。

[36] 『世界文化』（1935 年第 9・10 号、10 月号）60 頁。前掲の著作集への再録（156 頁）にあたり、ソ連について「良い政治」と表現していた箇所を「新しい政治」と改めている点からは、スターリン時代の諸問題を踏まえた修正を施したことが読み取れる。

[37] 『世界文化』（1936 年第 17 号、5 月号）52―52 頁。

[38] 『世界文化』（1937 年第 33 号、9 月号）37―37 頁。

[39] 『世界文化』（1937 年第 34 号 10 月号）34 頁。

[40] 新村、前掲書、54 頁。

[41] 久野、前掲書、82 頁。

[42] 伊藤俊也『幻の「スタヂオ通信」へ』（れんが書房新社、1978 年）165 頁。

[43] 中井らの検挙日、留置所の変遷については、馬場俊明『中井正一伝説―二十一の肖像による誘惑』（ポット出版、2009 年）184 頁を参照。

[44] 前掲「座談会」、29 頁。1935 年の小学校教員の初任給は 45 円～ 55 円であった（森永、前掲書、398 頁）ことから、500 円を工面することは、やはり小さくない負担であったと考えられる。また、「京都スタヂオ通信」時代の斎藤雷太郎は、1936 年 4 月「金五百円也の国債を保証金に出し」、有保証化を成し遂げていた。大部屋俳優であった斎藤が、生活を切り詰め、カンパや広告を集めに走り回った末のことである（斎藤「『土曜日』について」8 頁）。「自分なりにできること」として「新聞を発行する」ということへの強い意志なくしては、この額を一人で工面することは不可能であったと、考えざるをえない。

[45] 前掲「座談会」、36 頁。

[46] 内務省警保局編『復刻版 社会運動の状況 10 昭和十三年』（三一書房、1972 年）134―136 頁。

[47] 平野謙、前掲論文、34 頁。

[48] 特高警察の取り調べがいかに「馬鹿げた」ものであったかについて、執筆の意図を執拗に問いただされるのみならず、後に述べる点とも重なることだが、特高は同人の日々の動向―利用した店舗名まで―詳しく記録していたことから、途方もないこじつけを展開した。

「おまえはよく同志社の学生を連れて、大学のそばのエルムという喫茶店へ行っとった」。言われるとたしかにエルムという喫茶店へよく行っていました。エルムというのは北海道の楡の木ですね。……「エルムに行っとった」と言うから、「よく行った」と言うと、「なぜエルムに行ったか」というんです（笑）。変なことときくなあと思いながら「学校に近いからでしょう」と言うと、いきなり、「ウソをつけえ、ほんまのことを言わんかあっ！」と言うわけです。「どう考えてもそれしかない」と言ったら刑事は「それじゃ、ほんまのこと言ってやろか」と言う。「言ってください」と言うと、「エルムという字をよく見てみろ、ELM（イーエルエム）、エンゲルス、レーニン、マルクスじゃないか！」（笑）というわけです。下衆の勘ぐりというのはまさにこのことです（笑）真下信一『真下真一著作集 第四巻 ヒューマニズムの精神』（青木書店、1979 年）14―15 頁。

また、前掲座談会のなかで新村は、「今思えばふきだすようなことですが、ぼくを調べた人は、フロン・ポピュレール（人民戦線）を花の名前だと思っていたわけですね」と述べ、続けて富岡が「もっとひどいのは、中井正一さんの帝王切開は（中井氏は、日本ではじめて帝王切開で誕生した）、天皇制をやっつけることだとこじつけたのですね」と述懐している（44 頁）。

[49] 奥平康弘『治安維持法小史』（筑摩書房、1977 年）のなかで、この事件は一つの項目を与えられ、分析が行われている。奥平は、当該雑誌の存続期間中、一度として出版警察上問題となったことがない点を指摘している。特高警察が第七回コミンテルンの新方針にもとづいて行われていたとの色眼鏡でもって事件を「デッチ上げ」し、反ファシズム統一戦線が政治・労働などの実際的な行動面で力を持つことを嫌い、また他の文化活動へと波及することを恐れたために、未然に鎮圧しようとしたという。

[50] 和田、前掲書、130―134 頁。

[51] 守屋典郎「和田洋一と私」鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』（世界思想社、1979 年）70 頁。

[52] 真下、『ヒューマニズムの精神』、14 頁。

[53] 松本三益「党の旗をまもってたおれた小林陽之助同志をおもう」『前衛』（日本共産党中央委員会、1962 年 8 月号）17―18 頁。

[54] 久野、前掲書、73 頁。

[55] 刑事局第五課「被告人大岩誠に對する治安維持法違反事件概要竝に檢事聽取書」（1938 年 7 月）9 頁。まず守屋典郎に関しては、松本三益が「守屋典郎同志から、君にあいたいという人がいる」と連絡を受け、大阪で小林陽之助に会ったと述べ（松本、前掲論文、17 頁）、守屋は「京都の特高部に、コミンテルンから派遣されて日本共産党の再建運動をくわだてていた小林陽之助との関係でつかまっていた」（守屋、前掲論文、70 頁）という記述から、連絡をつけていたことは裏付けられるといってよい。

また、禰津正志との関係については、禰津自身が「大岩誠の紹介で、モスコー帰りの共産主義者小林陽之助（ねずは小林の実体を知らず、技師で、森永文典という名で京大病院に皮膚病の治療に来た者とばかりしんじていた）と交際したが、それもフランス、ドイツの文化運動を話題としたものが主であった」（ねず、「プチブルの同人雑誌『世界文化』」、82 頁）と述べている。

小林との交際のなかで、禰津は新村猛への紹介を依頼され拒絶しているが、久野は大岩と禰津が同時期にフランスへ留学し、大岩に面識があったことから（大岩はマルセイユで共産主義運動に従事していた）、大岩―小林の関係について文脈を理解していたと指摘している。久野によれば、人のよい新村が、大岩を『世界文化』グループの準同人格へ引き入れてしまったというが、新村がフランス文学研究者であったことを考慮すると、在仏経験のある大岩にある程度親近感を抱くこともありえることではある。一方で、三高時代の同年生であった中井正一は大岩をあまり信用しておらず、大岩がある宴席で「哲学科の浪人どもは帰れ、帰れ」と「イバリ屋」を発揮したところ、「真下信一氏に殴りたおされました」という指摘もある（久野、前掲書、74―75 頁）ように、大岩との距離が近かった同人は、まず禰津、次いで新村ということになろう。

[56] 平野、前掲論文、34 頁。

[57] 新村、前掲書、69 頁。